

國分功一郎『暇と退屈の倫理学』を読んで

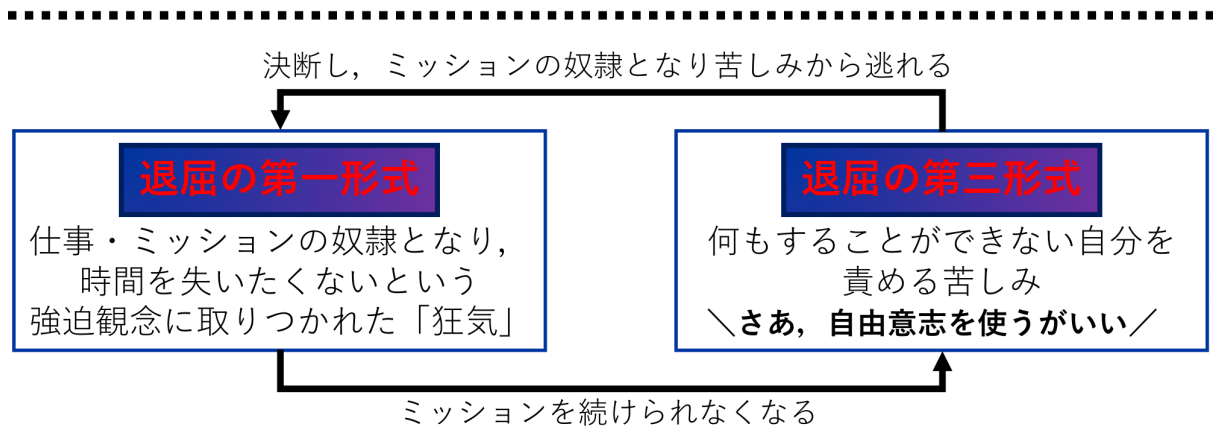
ハイデッガーの退屈論，國分の 〈暇と退屈の倫理学〉
(≒忙しさの倫理学)

退屈の第二形式

II

退屈と気晴らしが絡み合った穏やかな生

- 人間は普段，退屈の第二形式を生きている
- 自分と向き合う余裕がある
- 第二形式を生きる(遊ぶ)のにも訓練が必要



参考文献: 國分功一郎，2012，暇と退屈の倫理学，株式会社朝日出版社，東京。

2019年11月26日

目次

1	ハイデッガーの退屈論，國分の〈暇と退屈の倫理学〉	2
2	自分は退屈の第三形式 = 第一形式を生きていた	2
2.1	学問の奴隷	3
2.2	〈Spinoza 描像〉は退屈から逃れるためのミッションだったのか	4
2.3	忙しさと，周囲の人間との摩擦	4
3	退屈の第二形式の中でこそ人は「自らを貫く必然的な法則を認識」できる	4
4	自分は何故，奴隷になったのか	6
5	退屈の第二形式に戻っていくこと	7
5.1	強引に人を退屈の第二形式へ引き戻そうとしてはならない	7
5.2	学問を消費せず，浪費する	7
5.3	浪費と消費	8

1 ハイデッガーの退屈論，國分の〈暇と退屈の倫理学〉

ハイデッガーは以下のように退屈を第一形式，第二形式，第三形式に分けて描き出した。第一形式から第二形式，第三形式へと進むにつれて退屈は深まっていく [1, p.217,p.234].

- 退屈の第一形式（何かによって退屈させられること） [1, p.205]
 - － 例えば，駅舎でなかなか来ない列車を待っている間に退屈すること [1, pp.206–207].
 - － 物が私たちに何も提供してくれないため私たちは〈空虚放置〉され，ぐずつく時間に〈引きとめ〉られる [1, pp.214–215].
 - － **仕事の奴隷**になっている人間の感じる退屈で，時間を失いたくないという強迫観念に取り憑かれた「狂気」がある [1, pp.232–233].
- 退屈の第二形式（何かに際して退屈すること） [1, p.205]
 - － 例えば，パーティーに参加してなぜか退屈してしまうこと [1, p.218].
 - － パーティーに際して退屈していると同時に，そのパーティーが退屈を押しえ込むための気晴らしである。このように退屈と気晴らしとが独特の仕方で絡み合っている [1, p.223].
 - － 暇（客観的）ではないが退屈（主観的）しているという事態 [1, p.230].
 - － **自分に向き合うだけの余裕**があり，「安定」と「正気」がある [1, pp.232–233].
- 退屈の第三形式
 - － 「なんとなく退屈だ」という声が私たちの存在の奥底から響いてきて，そこに耳を傾けないわけにはいかないこと [1, pp.236–237].
 - － この声から逃れるにあたり，日々の仕事の奴隷になることを選択すれば，第一形式の退屈が現れる。退屈と混じり合うような気晴らしを選択すれば，第二形式の退屈が現れる [1, p.300].
 - － 退屈する人間には自由があるのだから，決断によってその自由を発揮せよとハイデッガーは言う [1, p.243].

これを踏まえ國分は〈暇と退屈の倫理学〉として次のように論じる*1。ハイデッガーの結論によれば，第三形式の退屈の中にある人間は決断することで自由という人間の可能性を実現させる。しかし決断した人間は決断された内容の奴隷になるのであり，それは第一形式の退屈のなかにある人間となることに他ならない [1, pp.301–302]. そして人間は普段，第二形式がもたらす安定と均整のある穏やかな生を生きており，何かが原因で「なんとなく退屈だ」の声が途方もなく大きく感じられるようになり苦しくなると，第三形式＝第一形式に逃げ込み仕事・ミッションの奴隷になるのである [1, p.305].

2 自分は退屈の第三形式＝第一形式を生きていた

私は長い間，何もすることができない自分を責めることと，自らに課したミッションの奴隷になることを交互に繰り返してきたのではないか。言い換えれば，退屈の第三形式と第一形式のループの中に閉じ込められていたのではないか。そしてその外に，退屈の第二形式という穏やかな生があるということ忘却してしまっ

*1 〈暇と退屈の倫理学〉とは，見方を変えれば〈忙しさの倫理学〉でもある。

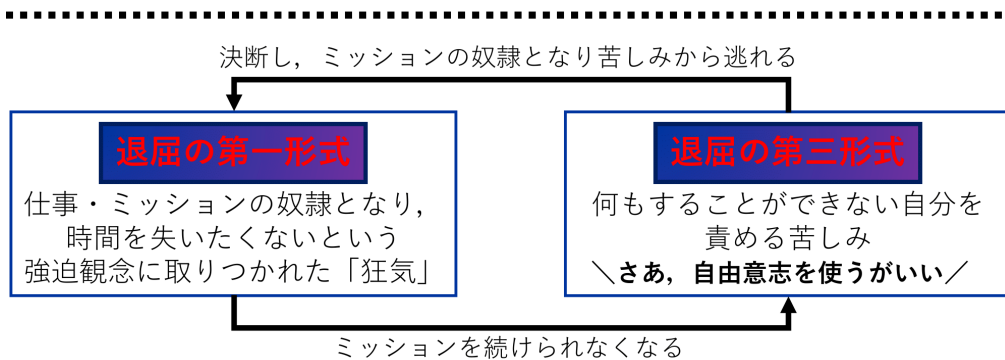
ハイデッガーの退屈論、國分の〈暇と退屈の倫理学〉 (=忙しさの倫理学)

退屈の第二形式

II

退屈と気晴らしが絡み合った穏やかな生

- 人間は普段、退屈の第二形式を生きている
- 自分と向き合う余裕がある
- 第二形式を生きる(遊ぶ)のにも訓練が必要



参考文献: 國分功一郎, 2012, 暇と退屈の倫理学, 株式会社朝日出版社, 東京.

図1 何もすることができない自分を責める苦しみと、自らミッションの奴隷になることのループに閉じ込められ、その外に退屈の第二形式という穏やかな生があることを忘却する

いたのではないか (図1 参照).

2.1 学問の奴隷

私は大学受験の直後、実りのない受験勉強で時間を無駄にしたと感じ、一人で憤っていた。受験期にも受験勉強のふりをして、受験とおよそ関係のない教科書を読んだりはしていたのだが、思う存分というわけにはいかなかったため受験に足止めされたように感じていた。それで入学直後の当時は、無駄にした時間を取り戻したくて仕方がなかった。今後しばらくは自分の好きなことだけを独学し、誰にもそれを邪魔させまいという気持ちに憑りつかれていた。大学の授業すら邪魔だと感じていた。大学は勉強をする場所ではなく、勉強の邪魔をする場所だと本気で思っていた。

やや言葉が苛烈だったかもしれない。ここでは実際に大学の授業にどれだけの意味があるのかという問題には立ち入らない。今は次のことを確認できれば十分だからである。すなわち以上の成り行きは、まさしく退屈の第三形式 = 第一形式として捉えられるということである。

受験期のことをもう少し詳しく振り返ってみよう。受験勉強と言っても現役生のときに問題集を既にながむしゃらに解いていたため、浪人生活を始めたときには万策尽きたように思われ、私は途方に暮れていた。成す術がなくなっているというのに、形の上だけ机に向かう気など起きるはずがない。これは単にやる気が足りないといったレベルの問題ではない。しかし私は、今すぐに何かを始められない自分を責めてしまった*2。こう

*2 自由意志は存在しないのだからやる気が出ないのは仕方ないというフレーズを頭の中でリピートしながら、私は自分の直面してい

なると無駄に苦しい時間だけが過ぎていく。そしてこんなとき「なんとなく退屈だ」という声が響いてくる。これは退屈の第三形式に対応する。そして私は学問の奴隷となることでこの苦しみから逃れた。これは退屈の第一形式に対応する。その際、学問の奴隷となることが有意義と感じられるためには、それが受験勉強や大学の授業であってはならなかった。

2.2 〈Spinoza 描像〉は退屈から逃れるためのミッションだったのか

〈Spinoza 描像〉にも退屈から逃れるためのミッションとしての側面があったのかもしれない。〈Spinoza 描像〉を“布教”する、すなわち自由意志を否定し当為命題の虚構性を暴露することが自分の使命だと心のどこかで考え、その使命が与えられていることに自分の存在価値を見出していたのかもしれない*3。そうではないとどうして言い切れよう。

或いはろくに遊び方を知らず、退屈の第二形式を生きることができない者が生み出した、不器用な、歪んだ形での「遊び」が〈Spinoza 描像〉だったのかもしれない。実際、自由意志を否定することから愉悦を引き出せることをニーチェは次のように書いている [2, pp.34-35]。

一つの理論において、それが反駁されうるということは真にその魅力を最も減じるものではない。これによってこそ、その理論は繊細な頭脳の人々を惹(ひ)きつけるのだ。百遍も反駁された「自由意志」の理論がその存続を保っているのも、やはりただこの魅力に負うもののように見える。——繰り返し誰かがやって来て、この理論を反駁するに足る自分の強さに満足を感じるのだ。

2.3 忙しさと、周囲の人間との摩擦

退屈の第一形式における「狂気」を生きている者の時間を無駄にするまいという態度や行動が、周囲の人間から見て攻撃的に映るということはあり得る。あるいは人が何かに没頭している姿は、近くにいる者に妬みや闘争心を抱かせるのかもしれない。こうしたことが周囲の見ず知らずの人間との間に摩擦を生む(それは通勤列車や自習室の中などに確かに存在している)。それが日々繰り返されると人間嫌いに繋がる可能性もある。

そうであるならば、人は仕事に没頭すれば疎んじられ、怠けていれば非難されることになる。いったい、どうしろと言うのだ。やはり最善策は人と関わらないことなのではないかと思えてくる。

こうした問題はくだらないことであるとはいえ、確実に人の精神を蝕んでいくものである。こういうことこそ、くだらないの一言で片付けて我慢せずにじっくりと対策を考えた方が良いのかもしれない(それは退屈の第二形式の中でこそ可能である)。

3 退屈の第二形式の中でこそ人は「自らを貫く必然的な法則を認識」できる

スピノザ哲学において

- 自由 ≡ 自己の本性の必然性に基づいて行為すること
- 強制 ≡ 自らの有する必然的な法則を踏みにじられていること

るのがやる気の問題ではないと知っていながら、やる気の問題にこだわり続けたのだ!

*3 そうであるならば「あなたの取り柄は何ですか」と聞かれたとき、「自由意志を否定していることです」と答えねばなるまい!

であり、それ故「自由であるためには自らを貫く必然的な法則を認識することが求められ」る [3, pp.261-262]*4。そしてそのためには自分と向き合う余裕が必要である。我々が手に入れた言葉を用いて言えば、退屈の第二形式の中でこそ人は「自らを貫く必然的な法則を認識」できる。さらに退屈の第二形式には「考えることの契機となる何かを受け取る余裕がある」のに対し、第三形式＝第一形式に逃げ込んでしまうと「もの考えることを強いる対象を受け取れなくなってしまう」と國分は述べている [1, p.333]。

このような認識は就活や志望校といった、将来について考える決定的な場面で特に重要になると考えられる。この大事なときに自らに課したミッションの奴隷になっていると、将来について考えられないため恐ろしい事態を招く。

退屈の第二形式の重要性を示す例をいくつか挙げてみよう。

例1 今、この文章を書くという自分に課したミッションの奴隷となり、他のことを考えられずにいるため、就職先について考えたりインターンの情報に触れたりする機会を失っている。(そのことに今、本稿で言及しているとは何と皮肉で滑稽なことだろう！)

例2 逆に夏期講習やインターンで忙しいと、形の上では将来のために何かをやっていることにはなるが、かえって自分にとって本当に大事なことは何かを考え、取捨選択する余裕を失うこともあり得るだろう。これについては國分も面白い例を挙げている。

たとえば、将来を思い悩む大学生にとって、自分に何ができるか、どんな仕事があるか、そういったことを考えるのは苦しい。しかも何をしたいのか分からない。おそらくそんなとき、「なんとなく退屈だ」という声が響いてくる。それにはとても耐えられない。だから、それよりも大きく鳴り響いている別の声を探す。たとえば、「資格がなければ社会では認められない」「資格をとっておけば安心だ」という世間の声。この大きく鳴り響いている声に耳を傾けていけば、苦しきから逃れられる。そうして、資格取得の決断を下す。決断してしまえば本当に快適である。資格試験の奴隷であることはこの上なく楽だ。しかも、世間からは「一生懸命頑張っているね」と褒めてもらえる。というか、周囲は褒める以外にない [1, pp.305-306]。

例3 第2.1節で触れた受験勉強の行き詰まりについても、有効な打開策は明らかにゆっくりと伸びしろを探し、勉強の方法を考え直すこと以外にない。そのようなプロセスはすぐに成果が上がるものではないため、見かけ上、非生産的なものとなるだろう。したがってここで要求されるのは、退屈を紛らわせ退屈と上手く折り合いをつける、あるいは退屈の第二形式を生きる術である。

例4 研究者が無理なく研究を続けていくにはそれを楽しむ余裕が必要だろう。第二形式の気楽さの中でこそ苦しまずに研究テーマを探し、試行錯誤できる。

以上の例を踏まえると、仕事の内容や相手の置かれた状況を知ることなく、ただ忙しくしていることを称賛し、逆に暇を持て余していることを怠慢として軽蔑・危惧するような見方はあまりにも単純であることが分かるだろう。

さらに人間嫌いの者を取り上げ、そのようなものが自由になるための道筋を具体的に考えてみよう。

- 自由意志を退ける。

- 人間嫌いの人に対して「人が嫌いでは生きていけない」と言い聞かせ(嘘だ!), 人間を好きになる

*4 そして「自由がスピノザの言うように認識によってもたらされるのであれば、自由意志を信仰することこそ、われわれが自由になる道をふさいでしまうとすら言わねばならない。その信仰はありもしない純粋な始まりを信じることを強い、われわれが物事をありのままに認識することを妨げるからである。」 [3, p.263]

努力をすることを無理に強いても、効果が上がらないどころか、かえってその人を苦しめる。

- 自らを貫く必然的な法則を認識する。
 - － 人間が嫌いであることは本人の身体が感じ取っている (交感神経が働き、緊張する)。
 - * 病院の待合室など、見ず知らずの人に晒される場所では気持ちが落ち着かない。
 - * 外出する時間が近づき、いざ見ず知らずの人がいる空間に出向こうとすると胸が苦しくなり、電車での通勤通学が一苦勞である。
 - こうした身体の発しているメッセージに耳を傾け、黙殺しない。
 - － なぜ人間が嫌いなのかを言葉で説明できるまでに至るのは容易ではないが、こうした事態を以下のように説明できるかもしれない。
 - * 周囲に気を許していない見ず知らずの人がいると敵対心が喚起される。
相手を圧倒しようとするのが習慣化すると、それを継続するのは疲れるにも関わらずやめられなくなり、人との接触自体が嫌になる。
 - * 逆に見ず知らずの相手が自分に敵対心を抱いているように感じる。
ペンの音、紙をめくる音、咳払い等はその表れではないかと感じ、それに対し突発的な怒りを覚える。
 - * 人とのトラブルに巻き込まれるのではないかといった、不測の事態への極度の不安を抱く。
- 受動的な部分を減らす (⇔ 自由に近づく)。
 - － 耳栓をする。音楽プレーヤーを用いて周囲の音を消す。
これにより事実上、周囲の人間は“消去”される。
 - － 在宅勤務、タクシーの利用により人との接触を避ける。

以上の解決策はあまりに単純であり、常識の範囲を出るものではないだろう。しかしその結論に至るのを、「人間嫌いであるべきでない」という考えが邪魔してしまう可能性がある。「人間嫌いであるべきでない」にも関わらず人間が嫌いである自分を認められないから、「自分は人間嫌いではない」と自分に言い聞かせてしまうのだ。ここで起きているのは「～であるべきでない」(当為命題)から「～でない」(事実命題)へのすり替えである。言うまでもなく、これらは意味が全く異なる。

4 自分は何故、奴隷になったのか

私は何故、奴隷になったのだろうか。何故、奴隷であることをやめられないのだろうか。直接的な理由は「なんとなく退屈だ」の声から逃れるためであると述べた。では、そうした事態に陥りやすくなるような構造が自分を取り巻いていたのだろうか。そのような間接的な理由として思い付くものを以下に列挙する。

- 退屈の第二形式を生きる術 (= 遊び方) を知らなかったからか。
「遊び方」と言うと奇妙に聞こえるかもしれないが、遊びにも訓練が必要だろう。
- 「暇があるのは罪である」という意識が働き、時間を生産的 (に見える) 活動で埋め尽くさずにはいられないからか。
時間に余裕があるような生き方をすることを自分に許していないのではないか。
あるいはそのような生き方を周囲が許していないと感じているのではないか (実際は皆、他人のことにそれほど関心がないのに)。
- 承認欲求が満たされていないのか。

心のどこかで自分の努力が報われていないと感じており、このような不満が自分をさらなるミッションへと盲目的に駆り立てる原動力となっているのかもしれない。

- 直ちに付け加えねばならないが、ここで私は努力を称賛する態度に与するのではない。努力礼賛の背後にはそれが自由意志の賜物であるとする考えが透けて見える。また物事を成し遂げるには努力が必要だと言う者は、人が快樂に導かれ無理なく何事かを成し遂げる過程を見過ごしている。快樂に導かれるとき、人は努力などというものをあざ笑うような力を引き出せるのである。
- 努力が報われるには一工夫必要である。標語的に言えば、努力は「報われるもの」ではなく「報わせるもの」である。例えば勉強してきたことが学校の試験で評価されなかったとしても、学習成果を基に web ページ上に記事を書けば「いいね」と思ってくれる人がいるかもしれない。

5 退屈の第二形式に戻っていくこと

5.1 強引に人を退屈の第二形式へ引き戻そうとしてはならない

私は退屈の第三形式 = 第一形式の中にいたため、自分と向き合えていなかった。しかしそのような人にそれを中断させ「自分と向き合え」と言うことは、その人を貫く必然的な法則を踏みにじることであり、したがって自由を妨げることである (第 3 章)。例えば実りのない受験勉強で時間を無駄にしたと感じ、今後しばらくは自分の好きなことだけを独学し、誰にもそれを邪魔させまいという気持ちに憑りつかれている者 (第 2.1 節) に、社会勉強と称してアルバイトをさせることがこれに当たる。國分もこのような意味で「人に『目を開け!』『耳を凝らせ!』などと強制してはならない」と言っている [1, p.334]。

実際、退屈の第一形式の中でミッションに打ち込んでいる者は、そこから引きずり出されるのを嫌がるだろう。あるいは何らかの理由で自分のやっていることが上手いかななくなり、ミッションを続けられなくなると、「自分は弱くなった」「力を失った」と感じ落胆するだろう。これは退屈の第二形式に戻るきっかけがあっても第二形式に戻ることができず、力を発揮できない惨めさを嘆き、退屈の第三形式の中で何もすることができない自分を責める苦しみに再び陥ることを意味する。

5.2 学問を消費せず、浪費する

幸いなことに最近私自身、自分の今までの生き方に疑問を持ち始めている。教科書を消化する、web ページ上に記事を書くといったことに気を取られ、学問そのものをよく味わう機会が少なくなっていたのではないか。このような事態は、自分は何かに取り組んでいるのだという観念を消費していると言い表され、物そのものを味わう浪費と区別される (第 5.3 節)。

そろそろ (あるいはとっくに) 私は人間的な生を取り戻し、自分に課したミッションを退屈の第二形式の中の気晴らしに変換して楽しむことを覚えても良い時期なのではないか。そこでは焦ることなく、自分を追い立てることもなく、家でお茶でも飲みながら、教科書を一読しただけでは理解できない箇所について調べつつゆっくりと読み進められる。なお、就職するとそれができなくなってしまうと思われるが、そう考えるのではなく、そのための時間的余裕と生活費を得るために仕事をすると考えても良いのかもしれない。

5.3 浪費と消費

ボードリヤールによれば浪費において人は物を受け取るのに対し、消費において人は物に付与された観念や意味を受け取る。したがって浪費は満足をもたらすのに対し、消費には限界がない [1, pp.144-147].

第3節で挙げた夏期講習やインターンの例を用いて言えば、これらに参加する人は「受験勉強をしている」または「就職活動をしている」という観念を消費していると言えるかもしれない。しかしこうした活動自体にどれだけの意味があるかは別問題である。

参考文献

- [1] 國分功一郎，2012，暇と退屈の倫理学，株式会社朝日出版社，東京.
- [2] ニーチェ，2009，善悪の彼岸 (木場深定訳)，株式会社岩波書店，東京.
- [3] 國分功一郎，2019，中動態の世界——意志と責任の考古学，株式会社医学書院，東京.